

指導資料

 鹿児島県総合教育センター

教育相談 第115号

- 小・中・高・盲・聾・養護学校対象 -

平成15年7月発行

授業に生かすカウンセリング

- ソーシャルサポートの視点から -

教師は、児童生徒の学習に対する興味・関心、知識・技能等についてのニーズを細かく把握し、児童生徒の情緒の安定を図りながら指導を行う必要がある。

『指導資料』第112号(平成13年11月)「授業に生かすカウンセリング」では、「受容」「繰り返し」「感情の明確化」等のカウンセリング技法を授業で活用することで、児童生徒が教師との信頼関係を深め、学習に意欲的に取り組むようになることを提示した。

今回は、医療・福祉をはじめカウンセリング等の分野で注目されているソーシャルサポートを取り上げ、この視点から授業を見直すことにした。ソーシャルサポートとは、「さまざまな悩みを抱えて生活している個人に対して周囲の人々から与えられるサポートのこと」(国分康孝編『現代カウンセリング事典』)である。私たちは、サポートを提供してくれる人や行政・医療・相談機関等の存在をより多く知り、それを上手に活用し必要なサポートを受けることで、心理的なストレスを軽減したり、問題解決を図ったりすることができる。

そこで、ソーシャルサポートの視点に立った授業を構成することの意義や留意点等について、実践事例を通して述べることにする。

1 授業におけるソーシャルサポート

児童生徒は学習につまずいたり、問題解決に困難を感じたりしたときに、必要とするサポートを受けることによって情緒的に安定し、主体的に学習に取り組むことができる。したがって、すべての児童生徒は主体的に学習を進めていく上で様々な支援を必要としている存在であるという認識に立ち、教師がソーシャルサポートの視点から授業を見直すことが必要である。

算数の時間を例にとると、解法の手掛かりが必要な児童もいれば、作業的な活動や教師の励ましが必要な児童もいる。教師は、解法の手掛かりが必要な児童には既習事項の活用などの情報を提供し、作業的な活動や励ましが必要な児童には、具体物やタイル等の半具体物を使った作業をさせたり、「君ならできる、やってごらん。」と励ましたりすることが大切になってくる。

このように、教師がソーシャルサポートの視点から授業を構成するということは、いつ、だれに対してどのような支援をする必要があるのかということを明確にして授業を行うことなのである。

2 教師が提供できるソーシャルサポート

授業において教師が提供できるソーシャルサポートは、次のように四つに分けることができる。

(1) 情緒的サポート

教師が、児童生徒に対して「ゆっくり考えていいんだよ。」などといった共感的で安心させるような言葉掛けをしたり、発言をじっくりと傾聴したり、うなずいたりして児童生徒の情緒的な安定を促す支援のことである。

児童生徒の学習を情緒的に支援するためには、教師自身が情緒的に安定していることが必要である。そして、児童生徒の興味・関心、学習態度、学習スピード、知識・技能などの実態を十分に把握しながら、学習への不安を軽減するような働き掛けをすることが大切である。

(2) 道具的サポート

教師が、ワークシートやヒントカード、学習資料、補助教材、用具など学習に必要な具体物を準備し、ニーズに応じて適切に提供する支援のことである。

ほかにも児童生徒が主体的な学習を進めるために効果的だと予想されるもの、例えば座席配置、個別・グループ・一斉といった学習形態、教室設営、視聴覚機器の配置といった学習環境も整備しておくことが大切である。

(3) 情動的サポート

教師が解き方のヒントを出したり、学習の進め方等を説明したりして、児童生徒の必要としている情報を正確に、しか

も適度に提供する支援のことである。

特に、自力解決を促すために必要な資料や用具の使い方、学習の進め方等の学習情報を児童生徒の学習の進捗状況に応じて適切に提供することが大切である。

(4) 評価的サポート

教師が、児童生徒に「その考え方でいいよ。」「よくできたね。」といった学習活動に関する評価結果を適宜返すことで、学習を修正させたり、発展させたりすることに役立てるための支援である。

発表内容に対する評価や学習内容の定着を確認するテストを実施したり、ノートや自己評価表等を点検したり、コメントを記入したりして、児童生徒が自ら学習を深化、充実させることができるように助言することが大切である。

3 実践事例を通じた検討

4 ページ目は、中学校3年社会科公民的分野「市場経済と金融」（全6時間）の第1時の実践例である。本時は、単元の導入であり、本時の学習がその後の学習への関心や意欲を高める重要な時間である。本時を参考に、ソーシャルサポートの視点から教師の指導・支援についてのメリットや留意点、他の校種への応用例について述べる。

(1) ソーシャルサポートのメリット

ア 児童生徒の学習ニーズを把握しながら適切に対応しようという教師の姿勢が指導・支援の内容に生かされ、きめ細やかな対応が行われやすくなる。

イ 教師が児童生徒の学習ニーズに適切に対応することで、児童生徒の主体的

な学習を促進し、学習に対する意欲や自己決定感、自己責任感を高めることができる。

(2) 留意点

ア 教師が行う指導・支援活動はその内容を4種類に明確に分類できない場合がある。例えば、児童生徒の発表に対する評価的サポートであっても、単に正解、不正解を知らせるだけではなく、発表への意欲を認め、今後の学習へのアドバイスといった情緒的サポートや情動的サポートも加味した指導をする必要がある。

イ サポートという言葉からは支援という側面が強調されやすいが、教師が全く指導しないということではない。極端な指導一辺倒、支援一辺倒ではなく、学習場面や児童生徒の実態に応じて適切に対応することが大切である。

(3) 他の校種への応用例

ア 小学校

小学校では、まず教師自身の得意とする教科領域等で実践し、他教科へ広げていくことが現実的である。

また、生活科や図画工作科等、児童の発想を大事にする教科では、必要な学習材料の準備（道具的サポート）の充実が望まれる。さらに、教師が児童の努力を認め励ますこと（情緒的・評価的サポート）は、発達段階の上からも有効である。

イ 高等学校

高等学校では、生徒が主体性を発揮しやすいロングホームルーム等におい

て、比較的ソーシャルサポートの視点での授業を実践しやすい。そして、その実践成果を各教科の授業に生かしていくことも大切である。

比較的多くの学習資料を活用する地理歴史・公民科や国語科等では、道具的・情動的サポートの充実が望まれるが、サポート内容をバランスよく検討し、情緒的・評価的サポートも工夫したいものである。

ウ 盲・聾・養護学校

盲・聾・養護学校では、児童生徒が特別な支援を必要としており、これまでも個に応じた具体的な支援を実践してきている。ソーシャルサポートは、授業場面だけではなく、学校での様々な教育活動の計画立案及び実践に活用できる。特に、教師一人の指導・支援の在り方に加え、校内における共同指導態勢の確立及び関係機関との連携等チームとしての援助の在り方についても大いに示唆を与えてくれる。

授業にカウンセリングの考え方を生かすということは、教師と児童生徒が温かい心で交流するとともに、教師が児童生徒をよりよく理解し、児童生徒の可能性を引き出していくということにほかならない。

児童生徒は、本来自らもっと学びたいと思っている。その児童生徒の学習ニーズを把握し、それにこたえる授業をソーシャルサポートの視点から構成していくことは、児童生徒の楽しく充実した学校生活を保障し、学校不適応の未然防止にもつながっていくと考えられる。

中学校第3学年社会科学学習実践例

1 単元名 「市場経済と金融」(全6時間)

2 本時(1/6)

(1) 目標

単元全体の見通しをもつとともに、労働者の今日的課題、賃金や労働条件、勤労の権利と義務等に関するディベートの準備を進めることができるようにする。

(2) 実際(加治木町立加治木中学校 前田洋介教諭の実践事例を基に作成)

過程	時間	形態	主な学習活動	指導上の留意点	
				道具的・情動的サポート	情緒的・評価的サポート
つかむ	15分	斉	1 プロ野球から労働組合について学ぶ。 FA制度について FA制度の利点	道 新聞記事「M氏大リーグへ」の記事を読み、プロ野球の労働組合は、一般の会社などとは異なっていることに気付かせる。	情 野球に関心が高くない生徒に配慮する。
		斉	2 単元全体の学習内容と学習計画を確認し、本時のめあてを立てる 賃金、労働条件等の問題について自分なりの考えをもち、ディベートまでの学習計画を立てることができる。	社会が好きなAさんに、「調べたことがディベートに役立つよ。」と話したら計画表づくりに目を輝かせながら取り組んだ。 道 学習補助資料集の計画表に自分の学習計画を書き込ませる。	情・評 発表内容が不十分であっても積極的に発表した生徒を認め励ます。 初めてFA制度を知ったBさんのつばやきを取り上げ、全員でBさんの喜びを共感的に理解したことで、Bさんが嬉しそうに微笑んだ。
調べ	25分	グ	3 成果主義の意味を理解する。 VTRを視聴した感想をまとめる。 賃金の年功序列制と成果主義の意味を調べる。	道・報 視聴時の観点、キーワードを示す。 個別指導が必要な生徒に説明する。	情 VTR等の準備を手伝った生徒をねぎらう。
		斉	4 ディベートのための準備をする。 ディベート学習の進め方とそのための事前学習について説明を聞く。	とまどっていたC君に対して、キーワードを具体的に示したことで、まとめがはかどり、C君の表情が和んだ。 道 学習補助資料集を活用して、学習の進め方を確認させる。	評 めあてや学習計画を立てることができたか確認する。
まとめ	10分	個	自分の理想とする賃金制は年功序列制か能力主義か選択する。	道 資料集や学習補助資料集を活用して、選択した内容について調べさせる。	情 VTR等の準備を手伝った生徒をねぎらう。
		グ	選択した立場に基づき調べる計画を立てる。	道 同じ立場の生徒でグループを作らせ、学習の進め方を確認させる。	年功序列制と成果主義の選択に迷っていたDさんは、安心して両方の内容を調べる計画を立てた。
まとめ	10分	個	5 学習のまとめと次時の学習の確認をする。 学習のまとめと自己評価をする。	普段はおとなしいF君の意欲的な学習を賞賛したことで、他の生徒も感心した様子だった。	評 労働者の今日的課題を理解し、ディベートまでの学習計画を立てることができたか確認する。
		斉	次時の学習内容を確認する。	道 ディベートのための調べ学習をグループで行うことについて説明する。	G君に補充指導をすることを伝え、安心した様子が見えた。

注1:「学習補助資料集」は、学習計画表、自己評価カード、参考資料を綴った自作学習ファイルを指す。

注2:形態の「個」は個別学習、「グ」はグループ学習、「斉」は一斉学習を表している。

注3:道は、道具的サポート、報は、情動的サポート、情は、情緒的サポート、評は、評価的サポートの内容を示している。吹き出しは、教師の働き掛けと生徒の様子を示したものである。

【参考文献】

嶋 信宏 『ソーシャルサポート研究の現状と臨床場面への応用』

東京大学教育学部心理教育相談室紀要 第12集 1990

石隈利紀 『学校心理学』 1999 誠信書房

(教育相談室)